20201025レムナント教会1部

**和解の祝福(Ⅱサムエル記14:24-33)**

　先週、私たちは、人はどうしようもない罪人だということを確認しました。それゆえ法律や道徳、また宗教、自分の良心などによって救われることはできません。そこに希望はないということです。〝キリスト・イエスの中にある神様の無条件の赦しの他には希望のない存在だ″というメッセージをいただきました。神様の恵みによって、ここにいらっしゃる皆さんひとりひとりは、その神様の無条件の赦しに預かっている幸いな者に間違いありません。しかし、一つ疑問になるのは、そのような不思議な無条件の赦しをいただいたにもかかわらず、クリスチャンの私たちが実際の生活の現場、現実においては、なかなか勝利が見られないということです。そのような神様の赦しをいただいたにもかかわらず、なぜ実際的には力強く勝利することができないのでしょうか。それは神様の赦しの消極的な理解だけに留まっているからなのです。神様に赦されました。イエス様が十字架で自分の罪のために血を流されました。だから、自分の罪はきよめられたのだ。もう地獄に行く心配などはない。だから、ほっとして安心なのだ。それも非常に大切なのです。しかし、神様の赦し、キリスト・イエスの十字架による赦しというものは、そこに留まるものではありません。そこにはより積極的な祝福があるということを知らなければなりません。

　今日の聖書の箇所の内容が私たちにそれを示しています。アブシャロムがダビデの赦しの下、逃げていたところから戻ってきて、エルサレムに滞在することになりました。聖書の表現によりますと、アブシャロムは人間的にものすごく憧れる、もてるような存在だったようです。しかし、エルサレムに戻って2年過ぎても、一度も父親のダビデの顔を拝見することができない状態がずっと続いていたわけです。赦されたと、だから戻って来た。でも、それで終わりなのです。そこでアブシャロムは、ダビデにこのような話をしてもらいたいと思ってヨアブに人をやりましたが、ヨアブからも返事がなかったので、ヨアブの畑に火をつけて、無理やりヨアブに来てもらって事情をお話ししました。それでヨアブがダビデと会って、こういう事情なのですと説得しました。それでダビデがアブシャロムを呼んで、2年以上経た後、アブシャロムと最終的に和解をして口づけをしたという内容です。たぶんダビデはいろいろな事情、思いがあったでしょうけれども、アブシャロムを赦すまでは、エルサレムに戻ってもらうまでは頑張りました。けれども、赦しがそこで止まっているような状態でした。ダビデが理解している赦しというものは、消極的なところに留まるようなものだったのではないかと見られます。

　今日この聖書の箇所を通して、キリスト・イエスの十字架によって神様の赦しをいただいたということがどれほど大きな、また積極的な祝福なのかということに目を留めていただきたいと願います。神様の赦しは、単に罪をなかったことにしたではなくて、神様との和解を生み出すものです。キリスト・イエスにある神様の赦しというものは、神様との和解を生み出すものだということをぜひ心に留めていただきたいと思います。私たちは神様の赦し以前に、エペソ2：1-3にあるように、自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、空中の権威を持つ悪魔、サタンに従っていた者であって、生まれながら神の御怒りを受けるしかない存在でした。その神様と和解させられるようになることが神様の赦しというものなのです。神様の和解のために神様は私たちの罪をきよめられるわけです。罪あるものとは神様が一緒になることができないためです。神の御怒りを受けるしかない存在だったので、ローマ8：2にあるように、右に転んでも左に転んでも滅びることしかない運命に捕らわれていました。死と罪の原理に捕らわれていた者が、いのちと御霊の原理によって、そこから解放されることになる、これが神様の赦しというものです。神の赦しの中には、〝御怒りを受けるしかなかった者が神様と和解する″という祝福があるということを忘れないでください。その結果、赦された者に対して私たちはこのように言われるようになります。ローマ5：1-2、これが神様の赦しであり、その赦しによる神様との和解という祝福です。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます」。神様と和解させられたということ、そこに進んでいかなければなりません。ローマ5：10にもそのようなことが書いてあります。「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです」。神との和解が強調されているわけです。神の御怒りを受けるしかない者と言われ、あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であると言われていた私たちが、ローマ8：15、その神様を「アバ、父。」と呼ぶことができる子としてくださる霊を受けるようになりました。神様とそのように和解させられて、神様との間のすべての壁が崩れ落ちて消えてなくなっているということを忘れてはいけません。エペソ2：16、「また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました」。十字架というものは罪をなくしただけではなくて、神との間に和解の祝福をもたらすものだったということを覚えていてください。へブル10：14、キリストが一度ご自分をいけにえとしてささげることによって、私たちのことを永遠に全うされたと言われています。その結果、へブル10：19-22を見ますと、このように記されています。「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです」。22節、「そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか」。神様に今までは御怒りを受けるべき子らとして、神に近づくことなどは不可能だった存在が、キリストの十字架による赦しによって、神の前に「アバ、父」と呼びながら堂々と大胆に出ることができる神様と通じ合う存在になりました。これが神の赦しです。罪がきよめられると同時に、この和解の祝福も同時に与えられたものだというこを覚えましょう。

　私たちが、キリストの十字架によって、神様と和解することができた、その和解の証拠が何かと言いますと、それがエペソ1：13なのです。イエス・キリストを信じる私たちの内側に聖霊によって証印が押されています。聖霊によって神ご自身が私たちの内側に来られました。これが和解の証拠中の証拠です。もし神との和解がなかったならば、そういうことはありえません。だからⅠコリント3：16には、あなたがたは聖霊が宿っている神の神殿であることが分かっていないのかと言われています。聖霊が私たちの内側に内住されるようになりました。このことこそ神様と罪人であった、滅びるしかなかった私たちが和解させられた証拠中の証拠なのです。もはや神様は遠くにいらっしゃる方でも、恐れる方でもなく、「アバ、父」と呼びながら、いつでも、どんなときでも神の前に出ることができるし、神様といつでも一緒で、神は神のすべてを私たちに与えられました。これが神との和解というものなのです。多くのクリスチャンが十字架による赦しを、罪がきよめられた、罪がなくなった、言うまでもないけれどもそこに留まっているのです。罪の赦しというものはそういうものではありません。神との和解の祝福を生み出すものが罪の赦しというものです。

　ですから、結論的にこれを短くまとめると、エペソ1：3にあるように、神との和解というものは、神の御怒りを受けるしかなかった私たちがどのように変わったのかというと、天にある霊的すべての祝福をいただくことになりました。これが神との和解というものです。神様と和解させられることによって、神のすべてが自分のものになります。それを神の子、相続と言います。それが十字架による赦しの中でもうすでに約束されている祝福であることを多くのクリスチャンが分かっていません。それゆえ赦されたのにもかかわらず、救われたのにもかかわらず、現実において現場では負けてしまうのです。まるでアブシャロムが戻ったのにもかかわらず、それ以上何もないかのような感じになります。そして、神様とのこの赦しによる和解というものは、神のすべての祝福がその人のものになることによって、その人は最高の栄光の身分を持つようになります。これが神の赦しの中にある祝福なのです。神の赦しは、罪人であった、地獄の子であったそのたましいを最高の栄光に富んだ身分に回復するものです。ここまでが神の十字架による赦しというものです。エペソ2：5-6にはこう書いてあります。「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました」。これが赦しというものです。なぜそうなったのかと言いますと、「それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした」。（エペソ2：7）10節にも「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです」。天にある霊的すべての祝福をいただいた結果、神に赦された私たちはどのような身分になるのかと言いますと、キリスト・イエスとともに天の所に座るようになり、キリストにしかできないことをこの地においてできる、そのような存在に造り変えられます。良い行いをするために。良い行いとは一体何でしょうか。罪人のたましいが救われて神様と一緒になること、それが良い行いです。ですから、十字架によって赦されたということは、罪がきよめられると同時に、エペソ1：23にあるように、すべてを満たす方によって満たされる、キリストのからだなる教会という存在に引き上げられます。よく覚えていてください。赦された途端にです。イエス・キリストを救い主として信じて受け入れた途端に神の子どもとなり、神様と和解させられ、神のすべての祝福が自分のものになり、その結果、この世に光を照らすことができる身分として引き上げられるようになります。イエス様は何の根拠もなく話したわけではなくて、マタイ5：14、乞食のような弟子たちに向かって、「あなた方は世の光ですよ」とおっしゃいます。Ⅰペテロ2：9、「あなたがたは王である祭司なのだ」と言われています。これが赦しの中に含まれている祝福なのです。多くのクリスチャンがイエス様の十字架によって「私は罪を赦されました。ありがとうございます」と、いつも罪赦された、罪赦されたと言います。又、罪を犯したときにも、キリストの名によって罪赦されたと。もちろん大切です。でも、そこ止まりなのです。それではこの世に勝利することはできません。神の赦しはそのような消極的なものではありません。神の赦しは神との和解をもたらし、その和解によって史上最高の身分に引き上げられるようになること、これこそが神の赦しなのです。ですから、赦された者にイエス様はおっしゃっています。ヨハネ14：12、あなたがたは、わたしが行うことを行うことができ、それ以上のことを行うことができるのだと。それがどういうことなのでしょうか。マルコ16：17-18「わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます」。Nobody、誰もできない、イエス様以外にはできない、いのちの働きができる身分に造り変えられます。赦された途端にです。

　どのような方法でしょうか。使徒1：8、聖霊が臨まれると、エルサレムから地の果てにまで、イエスの証人となります。たいした偉いことをやるからではなくて、ただイエスの証人として、イエス様が行っていたことと同じことが行える存在に引き上げられるようになります。赦された途端に。マタイ28：16-20、天と地のすべての権威をイエス様がお持ちになって、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授けなさい。誰がそのことをできるのでしょうか。政治家なのでしょうか。お医者さんでしょうか。法律家なのでしょうか。経済学者なのでしょうか。クリスチャンの私たち以外にはできません。イエス・キリストの血潮によって赦されたクリスチャンにしかできないNobodyの祝福がそこにはあるわけです。それが十分できる存在として赦された途端に神と和解させられ、神のすべてのものがその人のものになりました。だから、皆さんの能力と現実がどうであろうが、そういうことと関係なく、世の光、伝道者としてこの地上を歩くようになるということです。皆さんがそれに気づいて、赦しの積極的な祝福を存分に信仰とともに味わうかどうかという問題だけが残っている課題なのです。信じなくても赦された途端に、最高に栄光に輝く身分に引き上げられたということには間違いありません。これは変わることはありません。残念なのは、悪魔、サタンの偽りによって、自分を見て、自分の過去を振り返って、現実を見ながら赦しの中にすでにセットで赦されているこの大きな素晴らしい祝福に目覚めないということがクリスチャンの残念な事実です。

　今日の聖書の箇所を中心に、ここにいらっしゃる兄弟姉妹の皆さんは、キリストの十字架を見上げるときには罪が赦され、罪がきよめられただけではなくて、その結果、神との和解の祝福、天にある霊的すべての祝福が自分のもので、だからこそ自分は世の光としてイエス様にしかできない福音宣教のいのちの働きが可能な身分である、そういう存在なのだ。何を食べるか飲むかのために生きるものではないという確信を持たないといけません。イエス様の十字架は、私たちをここまで造り変えられる威力なのです。単に罪がなくなった、良かったなではありません。放蕩息子のお話があります。放蕩息子が自分の相続を前借りして、それを持って行って自分のやりたい放題、すべてやって、そして、費やして全部なくなって食べ物にも困るようになりました。そのときにこの放蕩息子は、自分の家のことを思い出します。「そうだ。ここで飢え死になるよりは、父親のもとに行って家のしもべとしてもらおう」。そうすると飢え死にはならないのではないかと思って父親の元に戻ります。そのとき、父親が遠くから息子だと分かって、走ってきて息子を抱きしめます。そのとき息子が言います。「私はこんなに悪いことをしてダメな人間です。私は父親の息子になる資格などはありません。ですから、この家にしもべの一人にしてください」。これは謙虚な話ではなくて、普通に考えるとそれが当たり前なのです。まじめにその息子は言いました。そのときに父親は、「何を言っているのか。死んでいた息子が帰って来たのと同じなのだよ。おまえはいつまでも私の息子なのだよ」と言って指輪をはめて息子としての身分を象徴する服を着せることによって宴会を開きました。これが回復です。これが赦しです。人間の方からは、赦される資格などありません。いろいろなことを考えるでしょう。当たり前かもしれません。私たちが持っている基準や道徳のレベルや法律家が見たときには、いろいろなこと、いろいろな計算、いろいろな評価があるかもしれません。しかし、父親は、神様は、キリスト・イエスの十字架によって、おまえを赦すだけではなくて、神の子どもとしての身分を回復させるわけです。それが父親の権限です。また主権です。誰もそこに文句を言うことはできません。父親だけにある権限なので。どんな法則もそれに文句を言うことはできないということをぜひ覚えていてください。赦しの積極的な祝福の中に入っていただきたいと願います。ローマ8：29-30を結論として、ぜひ心に留めてください。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです」。イエス・キリストが長子、私たちは次男坊と言われます。「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め」、ここで終わりではありません。「義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」。いつでしょうか。義と認められたその瞬間、イエス・キリストを受け入れた瞬間、その人の体質が、刻印が変わっていないままの状態でも、イエスを受け入れた瞬間、イエスの血が流れるその瞬間、その人に栄光を与えられました。イエス・キリストと同じ身分をもってこの世を生きることができる者にされました。これが本物の赦しというものです。キリスト・イエスの十字架の中にある神様の無条件の赦しを、私たちは分割で考える場合が多くありますが、神の赦しは分割ではありません。罪がきよめられて、ある程度、時間が経ちますと和解が与えられて、その後、伝道者の身分が与えられたり、そのように分割で考えることはやめましょう。神の無条件の赦しはセットです。いつも一括払いです。私もこの年になるまで長い間教会生活をして来ましたが、教会の中で見られる非常に残念な悲しいことが、皆分割で考えるのです。ここまでしか考えられません。自分のレベルに合わせて。神様の赦しは私たちのレベルに合わせて応じられるものではありません。無条件、罪をきよめると同時に神の子どもとして受け入れて、神のすべての祝福を与えられてこの世を生かすことができる世の光として生きることができる身分まで引き上げるものなのです。ただいつ私たちがそれに気づくか、それだけの問題です。もし神様の赦しを確信して喜んで、それで自分の人生そのものを根本的に安心することができないように邪魔することであれば、その赦しは無条件であるということを覚えてイエス様だけを見上げつつ、邪魔するすべてを退けるようにしてください。これは先週のメッセージです。

　それから、そこで終わりではなくて、ぜひ考えてください。〝自分は神様の無条件の赦しをどのように思って、どのように理解しているのか″と自分に問いかけてみてください。〝もしかして消極的に留まり分割のように考えて、その結果、神の前に大胆に出ることができないでいるのではないか″ということを問いかけてチェックしてみてください。そして、そこをクリアして、そんなもんじゃないんだと、神の赦し、今日のメッセージを握って、堂々と神のすべての祝福が自分のものだと告白してください。そして、自分はどのような現場、どういう現実であっても、伝道者、光を放つ者として召されているという確信をもって、その伝道者としての歩みを全うすることに十分だということを告白してください。それが神の赦しを積極的に味わうことです。ある人が刑務所で刑期を終えました。それから刑務所から出るようになります。出た時にその人は、「もう自由なのだね、解放されたのだね。もう刑務所ではないのだね」と安心して喜ぶようになるでしょう。それで刑務所の前で「もうさようならなのだよ」と言う。それは良いことです。でも、その次の日も、次の日も、来年も、次の年もずっと刑務所の前で「私は刑務所ではないよ。私はここから出たのだよ」としていてはおかしくないでしょうか。出たのであれば、その感激とともに、今まで刑務所の中でできなかった自由の世界でできることをやりながら突き進んでいかないといけないでしょう。それなのに多くのクリスチャンが、赦された、地獄はもう免れた、死ぬ時までずっとそればかりなのです。天にある霊的すべての祝福をいただいた、それが和解です。皆さんのレベルがどうであれ、性格がどうであれ、どんな過去を持っていようが、現実でどのように弱さを抱えて悩んでいようが関係なく、キリスト・イエスによって天にあるすべての祝福は皆さんのものなのです。それを信じることを信仰と言います。なぜ信じられるのでしょうか。イエス・キリストなのです。だからこそ私はCVDIP、伝道者なのです。今日の交読文の中にあったように、そこら中の人のように、また以前のように、何を食べるか飲むかのために生きる存在ではもはやありません。

　ですから、皆さん、わざとでも祈りの時間を設けるようにしましょう。一日邪魔されない静かな時間、一回だけでもいいです。これは律法や形式ではありません。あまりにも分割の考え方を持って騙されているので、その祈りのときに神の前でイエス・キリストの御名によって、自分に与えられている神の完璧な祝福を数える時間を持ってください。どのような祝福が自分のものなのか。感情がついて行くのか、感激が沸き起こるかどうか関係なく、祈りのときにまず神と和解させられた祝福、神からの完璧な祝福を数えてみるときを持ちましょう。そして、その祝福が認められるのであれば、大胆に告白してください。私を通してキリストのいのち、愛、権威、力が流れ出て、私が行く先々において、地獄とのろいの権威が崩れて、悪魔と悪霊が追い出されて、不信仰の暗やみが砕かれるように、いのちの運動が行われるように、神の国が臨まれるようにしてくださいと。そういう存在ですから。それが祈りの時間に確認して祈ることです。そうすることによって、日曜日の礼拝のときには、みことばを通してそれを確認し続けることなのです。ぜひそのような祈りを通して、今までとは違う、本当にエキサイティングなクリスチャンの人生を、苦難がやってきても何一つ問題にならない、すべてが機会になる素晴らしい勝利の歩みを歩んでいただきたいと願います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。イエス・キリストが十字架で血を流されることによって、私たちは神様から無条件の赦しをいただきました。しかし、悪魔、サタンは、この赦しを分割として考えるようにして、全く力のない信仰生活を送るように騙しています。神のみことばに基づいて、神の無条件の赦しは、神との和解、最高の栄光の伝道者の身分に造り変えられた、このすべてをセットにしていることを覚えて、祈りを通して確認することができるようにひとりひとりを祝福してください。そして、これから一歩、一歩の歩みに神の国が臨まれる勝利を体験するようにしてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。